

山賊の娘 ローニャ

2014年12月31日

『山賊のむすめローニャ』(さんぞくのむすめローニャ、*Ronja Rövardotter*)は、1981年にアストリッド・リンドグレーンによって書かれたスウェーデンの児童文学作品である。1984年にタージェ・ダニエルソン監督により映画化されている。また、2014年秋に宮崎吾朗監督によりテレビアニメ化され、2014年10月11日(土)からNHK BSプレミアムで連続放送が開始された(毎週土曜日、19時から)。

第1話は「かみなりの夜の子」12月27日は第13話「あわれな山賊たち」だった。

山賊の娘ローニャと少年ビルクは、ライバル関係にある首領たちの子供であった。落雷によって2つに割れた古城で出会い、しだいに仲を深めていった2人は、山賊間の対立を止めようとする。



宮崎吾朗監督のコメント

ジブリの外へ武者修行に出された僕に、川上さんが最初に提案した企画は、僕も大好きな堀田善衛さんの『路上の人』でした。西洋中世のキリスト教を扱ったこの本を、何とかTVシリーズに出来ないかと1年余り格闘しましたが、僕らの手には余り過ぎ、結局断念せざるをえませんでした。

そんな時に思い出したのが、かつて映画化の企画を断念した『山賊のむすめローニャ』でした。難しいテーマを扱った原作を、無理やり映像化しようと試みるよりも、子どもたちにむけた作品をきちんとやるべきではないか、と思ったのです。僕もTVで育った人間です。その自分が子どもだった時に観たようなものを、今度は大人になった自分が、今の子どもたちに向かって作るべきだと思ったのです。

偉大なアストリッドおばあちゃんは『山賊のむすめローニャ』で、子どもたちには自ら成長していく力を信じなさい、大人たちには子どもから大いに学びなさい、そして子どもも大人も互いを尊重し合い、本当の意味での自由を手にしなさい、と言っているように思います。そのメッセージを、誤ることなく映像にすることが出来たら、これに勝る幸せはありません。まだ道半ばではありますが、僕たちの『山賊の娘ローニャ』が沢山の皆さんに観ていただけることを願っています。

宮崎吾朗監督初のテレビアニメーションシリーズ「山賊の娘ローニャ」。雄大な森に住む山賊の一家、そのひとり娘であるローニャの成長を通して描く、家族の物語です。

物語の舞台は、中世ヨーロッパ風の世界に広がる雄大な森。主人公の少女・ローニャは、その森の巨大な古城に暮らす山賊マッティスの一人娘として生まれます。父、母、そして山賊仲間たちの愛情を一身に受けながらすくすくと成長したローニャは、ある日、一人で森に出ることを許されます。

初めて足を踏み入れた森には、不可思議な生き物たちが棲んでいました。自分の力で、時には両親の助けを借りながら徐々に森で生きる術を学んでいくローニャ。そして、ビルクという名の少年との運命的な出会い……

子どもたちの未知なるものへの憧れと成長の喜び、子の成長を願う親の愛情、親子の葛藤と和解……本作では、ローニャという一人の少女の成長をとおして、家族の物語を描きます。

原作について



原作者であるアストリッド・リンドグレーン(1907年-2002年)は、『長くつ下のピッピ』や『ロッタちゃん』などの作品でその名を世界中に知られ、1958年には国際アンデルセン賞を受賞したスウェーデンを代表する児童文学作家。

『山賊のむすめローニャ』(原題: Ronja Rövardotter)は、1981年に書かれたリンドグレーンの代表作の一つで、美しい自然を背景に、親と子、少年と少女の愛情を見事に描いたファンタジー。日本でも、大塚勇三氏による翻訳が1982年に岩波書店から刊行され、以来30年以上にわたり読み継がれている名作児童文学である。

1984年には本国スウェーデンでタージェ・ダニエルソン監督によって、実写映画化され、1985年のベルリン国際映画祭で“独創的な映画賞”を受賞している。

[ページトップへ](#)